

ゼゼミ・ヴァイヒプロート
— 『ブデンブローク家の人々』における女性像とキリスト教 —

伊藤 白

1. はじめに、そして結論

「ゼゼミ・ヴァイヒプロートって誰だ？」と思うかもしれない。けれども、私に言わせれば、このせむしのおばあちゃんこそ、トーマス・マン初の長編小説『ブデンブローク家の人々』における、隠れたヒロインなのだ。というのも、一家四代の没落を描いた 750 ページにわたる力作の最終場面を、彼女は堂々と独り占めするのだから。

「本当にそうなのよ、天国で会えるのよ！」

ゼゼミは力いっぱい、挑戦するかのように皆を見つめた。

彼女は身じろぎもせず立っていた。それは善き戦いの勝利者であった。なぜなら、彼女は女教師としての理性から与えられた試練と一生をかけて戦ってきたのだから。そこに立つゼゼミは、せむしで、小さく、確信に震えていた。それはまるで、情熱的に糾弾する女預言者の姿であった。(I / 759)¹ …… ①

もちろん、これだけを根拠に彼女を「隠れたヒロインだ」などと言えば無理がある。なにしろゼゼミは、全登場場面を足し加えても 10 ページにもならないほどの端役なのだから。けれども、その存在意義は、実は計り知れないほど大きい。この小論の中で、日本一ゼゼミ・ヴァイヒプロートを愛する者として、いやそれどころかおそらく世界で二番目に、作者トーマス・マンに次いでその魅力を知っている者として、読者の注意を喚起できれば幸いである。

研究者のあいだでは有名なことなのだが、この場面の構想は作品企画の初期に行われている。マンの残したメモによると：

¹ トーマス・マンの作品からの引用は次の全集による(巻号/ページ)。Thomas Mann: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Frankfurt am Main 1990. 便宜上、段を下げての引用には通し番号をつけておく。

長編の終わり:小さなヨハンの死後、トーマスの未亡人とアントーニエ、クリスティアン、クロティルデ、そしてゼゼミが一堂に会す。ここで、最後の言葉として、ゼゼミの「本当にそうなのよ！」² (強調は原文による)---- ②

編集者 Wysling の注によれば、この「本当にそうなのよ！(Es ist so!)」は、この小説の冒頭、幼いトニー・ブデンブロークが無邪気に暗唱する『小教理問答』の一節、「これは何ですか」に対する応答の変化形であるらしい。『小教理問答』とは、もちろんルターが 1529 年に子供のキリスト教教育のために書いた問答形式の教義解説書だ。ここで問題になる箇所は使徒信条についての解説で、使徒信条を一節ごとに区切って提示し、「これは何ですか(Was ist das?)」と子供に質問をさせ、それに対して大人が分かりやすく答えるという形式をとったものである。答えのパート最後の決まり文句が「これは確かにまことです(Das ist gewißlich wahr)」という言葉で、そのバリエーションがゼゼミの「本当にそうなのです！(Es ist so!)」なのだという。つまり、このゼゼミの台詞はこの作品全体を総括する重要な役割を担っているのだ。

とはいえ、ゼゼミはまったくの端役だ。だから彼女を「隠れたヒロイン」にまで仕立て上げるにはそれ相応の工夫が必要である。手順としてまず、そのゼゼミ・ヴァイヒブロートとはいかなる人物なのか、それを確認しておく必要があるだろう。その上で、引用①にも顕著なゼゼミの「女性」性と「キリスト教」性から彼女の意義を読み替えることを試みる。そしてさらに、— これについてさらに詳しく論じるためには別の機会を設けようと思うが — これまで別々に論じられてきたマンの「女性像」と「宗教」の問題が、根深いところで密接に絡み合っていることを少し匂わせることができれば、それをもってこの小論の目的達成としたい。

2. ゼゼミ・ヴァイヒブロート

何しろ全部で 10 ページ。この老嬢の軌跡を追うことはきわめてたやすい。ゼゼミ(本名テレーゼ・ヴァイヒブロート)ははじめに、トニーやゲルダの寄宿学校の教師として登場する。その姿のなんとすてきなことか！と思うのは私だけだろうか。

テレーゼ・ヴァイヒブロートはせむしだった。それもひどいせむしで、机と比べてもさして高くはないくらい身長しかなかった。彼女は四十一歳だったが、外見の満足を重視したことなど一度もなかったのも、まるで六十か七十のおばあさんのような服装をしていた。(・・・) この小さなミス・ヴァイヒブロートは、茶色の賢く鋭い目と、ちょっと曲がった鼻、時にきつぱり

² Wysling, Hans / Schmidlin, Yvonne (Hrsg.): *Thomas Mann Notizbücher 1-6*. Frankfurt am Main 1991, S.74.

と結んだ薄い唇をしていた…。総じて、彼女のこの小さな姿と所作の一つひとつは、確かに滑稽ではあったが、誰にも尊敬の念を起こさせずにはおかないような迫力を持っていた。
(I/85) …… ③

それに続けて語り手は、ゼゼミのきわめて重要な特性を紹介する。

テレーゼ・ヴァイヒプロートは多読な、それどころかほとんど博学といつてよいくらいの老嬢であったが、そのため子供の頃の信仰心や積極的な宗教性、つまりいつかあの世で彼女の華のないつらい人生が報いられるにちがいないという確信を守りつづけるためには、ちよつとした真剣な戦いを続けなければならなかった。… ④

この特性を重要と思うのには二つ理由がある。二つ目は後ほど論じることにするが、まず一つ目は、冒頭で紹介した引用①、すなわちこの小説の最後の一文がほとんどこの箇所を繰り返しているということだ。とはいえ文として単純明快とは言えず、邦訳にも誤訳が目立つ箇所でもある。³ 無粋を承知の上でこの両者を少し読み込んでみたいと思う。

この二つの箇所から明らかになるのは、ゼゼミがある戦いを続けていたことである。その戦いは「教師としての理性から与えられた試練」との戦いであり、学問を知ったがゆえに生じたものであり、その目的は「子供の頃の信仰」や、「あの世で彼女の華のないつらい人生が報いられるにちがいないという確信」を守ることにあつた。つまり、子供の頃には素直な信仰心の持ち主だったゼゼミが、その信仰心を揺るがすような書物、したがって近代合理主義的な学問に触れたために、その二つのあいだで葛藤を続けなければならなくなつたのだ。遠い日本にいるとなかなか理解できないことかもしれないが、ヨーロッパ人にとって信仰が - ひいては「絶対的な真理」が - 啓蒙的な合理性によって一度否定されたのはきわめて衝撃的な事件であつた。つまり、ここに描かれるゼゼミは全近代ヨーロッパ人の葛藤を背負っていることになる。最後の台詞「本当にそうなのよ」は、彼女がこの迷いに終止符を打ち、最終的に宗教を、来世を信じるという信仰を固めたという宣言でもあつた。ゼゼミの「戦い」の表現が複雑なのにはこのような込み入つたわけがあつたのだ。

話を進めよう。ゼゼミの大きな特徴はその話し方にある。全ての音を明晰に発音しようとするあまり、

³ 森川俊夫訳(新潮社『トーマス・マン全集 I』)では、①の訳においてはゼゼミが「誘惑に抗し(…)女教師の理性の立場に立って」戦いを続けてきたとしているおり、「誘惑(=試練)」が「理性」によって生まれたものであることが理解されていない(595頁)。望月市恵訳(岩波文庫『ブデンブローク家の人々』)は④を「読書が好きで(…)子供のころからの信仰、ポジティブな宗教心を失っていなかったし」と順接的に訳し、「読書」が「信仰」を揺るがす存在だったことを見落としている(上巻 118頁)。時を遡って成瀬無極訳(岩波文庫『ブデンブローク一家』)では大意こそ取れているものの、①の *Anfechtungen* (誘惑、試練) という重要な単語を訳出していない(4巻 292頁)。

しばしば母音が変化してしまう。その最も印象的な例は、「しばばせにね、いい子でね！（Sei glücklich, du gutes Kind!）」であろう。

トーニがグリーンリヒと並んで柱廊の間の姿を見せたとき、ゼゼミ・ヴァイヒプロートは「しばばせにね、いい子でね！」と言い、ぐっと背伸びをすると、トーニの額に軽くちゅっと音を立ててキスをした。（I /165、強調は原文による）… ⑤

この台詞は、ブデンブロック家の節目ごとに、ライトモチーフの一つに数えいられるほど⁴ 繰り返し用いられる。しかも困ったことに、ゼゼミにこう祝福されて旅立った人々は皆そろって不幸に陥る。この台詞は、ゼゼミがこれほどまでに善良でなければ、呪いにさえなりかねないような言葉なのだ。

さて、そのようなライトモチーフ的登場シーン以外では、ゼゼミが描かれるのはあと二箇所のみ。一つ目は、教師を引退したゼゼミが毎年開くクリスマスの祝賀の模様である。ハンノはこの日を「小さな茶番劇のように楽しみにしている。というのは、「神に召される日も近い（I /547）」と覚悟し、力の限り真剣に聖書の言葉を語るゼゼミの意図とは裏腹に、この祝宴では必ず何かとんでもない珍事が起きるのだ。過去には赤いポンチがこぼれて部屋中びしょびしょになったり、クリスマスツリーが見事なタミングで転倒したりしたのだが、前年にはついに火事まで発生した！

「喜んでいなさい！」ゼゼミはかきあげた首を激しく震わせながら言った。「もう一度言います。喜んでいなさい！」しかしこの瞬間、彼女の頭上でぼうぼう、ひゅうひゅう、ぱちぱちと音をたてて透かし絵が火に包まれはじめたのだ。マドモアゼル・ヴァイヒプロートは、小さくあつと声をあげると、誰も予想しなかったほど見事で敏捷なジャンプを見せて、降ってくる火の粉から逃れたのだった…。

ハンノはこの老嬢がやっつてのけたジャンプを思い出すといたく感動し、何分間も笑いつづけた(…)。(I /549) … ⑥

そしてもう一箇所が、はじめに引用した最後の場面を含む最終章である。最終章はゼゼミの「『それはいけません、いけませんよ、ゲルダ！』（I /754）」という台詞で始まる。夫トーマスに続き一人息子のハンノを亡くしたゲルダが、リュウベックを去って故郷へ帰ってしまうという場面。ここには離別の際してゲルダ、トーニ、クロティルデ、トーニの娘エーリカ、三人のいとこすなわちフリーデリーケとヘンリッテ、プイフィ、それにゼゼミの8人の女性が集っている。ゲルダの帰郷を必死で止めようと「百回

⁴ Moulden, Ken / v. Wilpert, Gero (Hrsg.): *Buddenbrooks-Handbuch*. Stuttgart 1988, S.131ff. (以下BHと略。)

も繰り返されたゼゼミの真剣な言葉は、かつての教え子トニーにあっさり一蹴され、ゲルダにはほとんど無視される。話題がついにハンノの死にいたったとき、トニーは「ハンノは天使だったわ」と泣き出す。これを受けて「天国はある／ない問答」が始まるのだ。エッセンスのみを引用しよう。

トニー「あの子は天使だったわ。」

ゼゼミ「今実際天使になったのよ。」

トニー「みんなどこに行ってしまったのかしら？」

フリーデリーケ「天国で再会できると言われているわ。」

トニー「ええ、そんな風に言われてはいるけれども…。」(I/758) … ⑦

そしてこのトニーの疑問に答えるのが、ゼゼミの信仰告白でもある「本当にそうなのよ！天国で会えるのよ！」である。しかし、誰にとってこの言葉は意味を持つのだろうか。この場面に居合わせた人々はゼゼミの言葉を理解できない。ゼゼミの願いがこれまで散々裏切られてきたことを知っている小説という空間は、この言葉にも疑いの目を向けるにちがいない。小説の作者はゼゼミの言葉が真剣なものであることを保証しながらもそこから距離を取る。つまりこの最後の台詞は、ゼゼミ本人にとっては完全に真剣なものであると同時に、他の誰にとっても深い意味をなさないという実に奇妙な緊張関係の中で描かれるのである。これがこの小説の終わりである。

ゼゼミの紹介を終わるにあたって、もう一言だけ付け加えておこう。ゼゼミにはれっきとしたモデルがいて、それは実際にマンの母親ユーリア・マンの教師だったマダム・ブセである。⁵ その誠実そうであつ意志の強そうな姿は既に公にされているので⁶ 是非一度参照されたい。

3. 「ブス」は不幸か

ゼゼミ・ヴァイヒプロートの重要な特性の一つは、彼女が女性であることである。それは最後のゼゼミの描写(引用①)において「女教師」「女預言者」と繰り返した女性形が用いられていることから強調されているが、さらに『ブデンブローグ家の人々』最終章の構想にも大きく関わってくる。先述のように、この場面に集まっているのは8人の「女性」であり、トーマスやハンノ、カイといった男性陣は記憶として彼女らの会話の中に登場するのみなのだ。

しかし、トーマス・マン文学研究において女性の地位は決して高くない。マンは「女性の内的生活について(…)何も言うことが」⁷ できず、マン作品の最も重要な女性の一人であるトニー・ブデンブロー

⁵ BH, S.23.

⁶ Wysling, Hans / Schmidlin Yvonne (Hrsg): *Thomas Mann. Ein Leben in Bilder*. Frankfurt am Main 1997, S.107.

⁷ Vaegt, Hans Rudolf: *Thomas Mann Kommentar. Zu sämtlichen Erzählungen*. München 1984, S.88.

クすら「言葉のある程度厳密な意味において考えず、ステレオタイプな発言をする」⁸のみであり、すなわちマンの創作は長らく「女性の描き方によって大きさを測ることのできる作品に属さない」⁹とされてきたのだ。マンの同性愛を分析した論文の一部として女性像を扱った Böhm¹⁰ が引き金となって、その理論を基本的に踏襲した Tillmann、マン作品中の女性を詳細にわたって紹介した Kim、エッセイ風に綴った Runge の 3 人が立て続けにこのテーマに関係する書物¹¹ を著してはいるが、トーマス・マン研究全体を見渡すならばきわめて遅れをとった領域といえることができるだろう。

その評価の低い女性の中で、ゼゼミはさらにもう一段低い地位に甘んじかねない。Böhm によれば、マンの女性への感情は、「自分の男性性を保証しなければならないという重圧」¹² を感じるときや、「唯一社会的に認められた性の対象として」¹³ 女性と関わらなければならないときにのみ、「絶望的な嫌悪」¹⁴ を感じるという性質のものであり、基本的に「無関心」¹⁵ であるため、彼の描く女性たちは「同性愛の隠蔽」¹⁶ という役割以外においてはマンにとって意味をなさない存在である。したがってマンの描く女性は「文学の伝統」¹⁷ からの引用で、因習的、古典的なものになってしまったというのだ。ところが、ゼゼミはこの機能にすら該当しない。Böhm は女性像を分析するに当たって、女性登場人物を7つの類型に分類しているのだが、¹⁸ わざわざ分類した7類型のうち、少なくとも二つ、「女教師」、「変わり者」というタイプは、彼の提示する「同性愛の隠蔽機能」と全く関係がないのだ。Böhm の分類法に同意するわけではない以上この類型にこだわるつもりはないが、もちろんゼゼミは「女教師」としてこのタイプに属し、切り捨てられてしまう。彼はそのタイプの象徴として『ブデンプロック家の人々』の最終章の「女性集会」を「徹底してネガティブなアクセントをつけられた頑強さ」¹⁹ と評価する。

しかし Böhm の説を逆に読むならば、マンにとっては女性のキャラクターたちが「同性愛の隠蔽」という重荷を背負っていたということになる。人間トーマス・マンにとって女性が何であったのかではなく、作品を書く作業ということを問題にするなら、女性を描くことはむしろマンにとって慎重を要する大問

⁸ Kurzke, Hermann: *Thomas Mann. Epoche-Werk-Wirkung*. München 1997, S.75.

⁹ Mayer, Hans: *Thomas Mann*. Frankfurt am Main 1984, S.260.

¹⁰ Böhm, Karl Werner: *Zwischen Selbstzucht und Verlangen. Thomas Mann und das Stigma Homosexualität*. Würzburg 1991, S.170.

¹¹ Tillmann, Claus: *Das Frauenbild bei Thomas Mann. Der Wille zum strengen Glück. Frauenfiguren im Werk Thomas Manns*. Deimling 1994; Kim, Youn-Ock: *Das "weibliche" Ich und das Frauenbild als Lebens- und werkkonstituierende Elemente bei Thomas Mann*. Frankfurt am Main 1997; Runge, Doris: *Welch ein Weib! Mädchen- und Frauengestalten bei Thomas Mann*. Stuttgart 1998.

¹² Böhm, S.194.

¹³ Ebd., S.195.

¹⁴ Ebd., S.196.

¹⁵ Ebd., S.193.

¹⁶ Kim, S.170.

¹⁷ Böhm, S.191.

¹⁸ Ebd., S.171ff.

¹⁹ Ebd., S.171.

題だったはずなのだ。「同性愛の隠蔽」機能には、愛する対象の女性が被る仮面と、愛する主体が被る仮面としての二つの面があるが、例えば、短編「小フリーデマン氏」の意中の人ゲルダ・フォン・リンリンゲンの持つ男性性は、確かにその背後にマンの同性愛の対象が隠されていることを知って初めて納得がいくように思われる。²⁰ 彼女はかつての研究者が言ったようなファム・ファタール²¹ でもなければ、「のちに売春婦として正体をあらわす天使」²² でもない。マン作品における総体としての女性が長く研究対象とならなかつたのは、むしろ逆に彼女らが「同性愛の隠蔽」という重荷を背負った、実に特殊な、つかみどころのない存在だったからではないか。果たしてゲルダ・ブデンブロークは古典的なヒロインだろうか。インゲボルク・ホルムやマダム・ショーシヤが主人公たちを魅了することに、読者は心から納得しているだろうか。

それに対し、ゼゼミはその機能から除外された女性なのだ。つまり「愛するもの」としても、「愛されるもの」としてもマンの「同性愛の隠蔽」には役に立たない存在、言い換えれば何らかの理由、醜かったり奇異だったりという理由で「男性世界から無視される」²³ 女性、すなわち恋愛の対象にならない女性たち。確かに、『ブデンブローク家の人々』の最終章、ゼゼミで始まりゼゼミで終わる女性の集まりの場面に集められた女性たちは、みなもはや恋愛をする可能性を失っている。

しかし、恋愛をするという機能を持たない女性たちに他の役割がなかったかということになれば話は別である。というよりは、結論から言ってしまうと、「同性愛の隠蔽」という重荷を負うことのない女性たちはマンにとって安全地帯であり、それゆえより自由に、こだわりなくマンの人生観や世界観、すなわちマンの視線が現れる場を提供しはしなかつただろうか。(トニーをのぞくならば)²⁴ ヒロインたちがほとんど内側から描かれることがないのに対し、これらの脇役たちは、内面から、19世紀リアリズムの手法をもって心理的に根拠付けられている。イメージのしやすい例としてはイーダ・ユングマンや『魔の山』におけるシュテール夫人をあげることが出来るだろう。もちろんここでは、われらがゼゼミ・ヴァイヒプロートをその代表の一人として提示したい。引用④の紹介文に続くゼゼミの描写を見てみよう。近代ヨーロッパ人・ゼゼミの複雑な心理は、説得力をもって裏付けられているのだ。

²⁰ Böhm, S.177ff および Kim, S.189ff 参照。具体的には友人 Paul Ehrenberg との関係が指摘されている。

²¹ Kim, S.192.

²² Böhm, S.191.

²³ Ebd., S.172.

²⁴ この作品においてだけでなくマン文学を通してあらゆる意味で例外的なトニー・ブデンブロークは、この文脈においても、「愛し愛される」ヒロインでありながら Kurzke に「ステレオタイプ」という評価を受ける(註8参照)ほどに、「脇役的」な19世紀リアリズムの要素をも持ち合わせているという意味で別格である。彼女のそのような性質は、マンの実際の叔母という具体的なモデルの存在のほかにも、『エフィ・ブリースト』からの影響によって説明が付けられている。以下の議論を参照。Harslem, Ralf *Thomas Mann und Theodor Fontane. Untersuchungen über den Einfluß Theodor Fontanes auf das erzählerische Frühwerk von Thomas Mann.* Frankfurt am Main / New York 2000, S.187ff.

それに対して[姉の]マダム・[ネリー・]ケーテルゼンは無学で純粹で單純な氣質の持ち主だった。「善良なネリー！」とゼゼミは言った。「まったく、あの人は子供だわ。一度も疑惑というものにぶつかっただことがないんですもの。戦いに耐えたことだってないんだわ。幸せな人ねえ・・・。」この言葉には羨望とともに輕蔑の気持ちが含まれていたが、これがゼゼミの――許せはするものの――欠点とも言うべき性格であった。(I/87) ---- ⑧

マン文学において生き生きと描かれるのは、主人公の相手役を務める女性ではなく、端役であり、醜女たちだった。「文学の伝統」から抜け出してきたかのようなのは、ゲルダ・フォン・リンリンゲンではなく、男主人公から「無視される」女性たちなのだ。このような女性は、それぞれにマンが経験から学び取った何らかの世界観・価値観を反映しているといえることができるだろう。そしてその書きっぷりからは、彼女たちに対するマンの親しみを感じ取らずにはいられないのだ。

4. 病氣されど長寿

ところで、そもそもマン文学における女性陣を――恋愛の有無にかかわらず――そもも低く評価してもよいものだろうか。確かに彼女たちは男性に比べてめったに「考えない」し、トーマス・ブデンブロークやセテムブリーニが「男」でなければならなかったことには象徴的な意味がある。この小説最後に生き残ったのが女性ばかりであった背景には、「バカは風邪を引かない」の原理が働いているのだ。一家の「没落」に伴ってその「繊細さ」が増大していくというこの小説の構造は、周知のとおりである。²⁵健康で健全な生活と引き換えるかのように、宗教や倫理・美的なものに対する感性を彼らは世代から世代へと先鋭化させ、あたかもそれがために生命をすら失うかのようなのだ。つまりこの女性ばかりで描かれた最終章は、その過程を経て筋力が絶えたその後の出来事、いわばその残り糟なのである。

しかし、一方で彼女達にハンノの曾祖父老ヨハンのような生命の單純な力強さがあったというわけではない。この女性集会からは、徹底して生の可能性が排除されている。この場面に集められた女性たちは、もはや次の生命を育む可能性を失い、醜く老い病んでいるのだ。奇妙なことに、小説の文脈からすればこの場面に居合わせるほうが自然なトニー・ブデンブロークの孫、この時点で9歳になっていたはずのエリーザベトがこの集会では忘れられている。もし彼女をこの場面に描かなかったことに理由があるとすれば、それはこの章から若々しい生命力をより徹底的に排除することにあつたのではないか、と思わずにはいられないのだ。つまり、彼女たちは、一家の育んでいった「精神性」も持ち合わせなければ、逆に一家が曾祖父老ヨハンの時代に誇っていた頼もしい「生命力」にも縁のない、いわば「風邪を引いたバカ」となってしまうのである。その意味では、この女性8人を「徹底してネガティブなアクセントをつけられた」と一網打尽にする Böhm の表現は、当を得ている。

²⁵ BH, S.169f

しかし Böhm は、ただの「ネガティブ」ではなく「徹底してネガティブなアクセントをつけられた頑強さ」という表現を使っているのだ。これは、逆の意味で的を射た表現になっているといえることができる。つまり、彼女たちは風邪を引いていたとしても「生き残って」いるのだ。繊細さではトーマスの上を行くかに見えたゲルダすら、トーマスよりも生き長らえて未亡人となる。悲嘆に暮れてセンチメンタルになっているトニーも、結婚には縁のなかったゴットホルトの三人娘もそしてゼゼミも、曾祖父のような単純な「生命力」に溢れているわけではなく、かといってトーマスやハンノのように放棄せざるを得ないほど弱々しいわけでもなく、「ネガティブに頑強」であり、実にしぶといのだ。それはきわめて重大なことなのではないだろうか。なぜなら、実際に八十歳まで生きたトーマス・マン自身が、老ヨハンやハンノ・ハンゼンのような単純な「生」だけでもなく、トーマスや例えばアッセンバハのような「精神性」だけでもなく、その間を生きたのであり、その生命力はゼゼミのような「せむしの長寿」に象徴されるようなものだったと思われるからだ。『ブデンプローク家の人々』の成功が明らかになってきた時期のマンの手紙をみてみよう。

はじめから「ある家族の没落」という副題をつけられ、ある種冗談めかした絶望感を基調とし、デカダンスの問題を扱った本が、「一般の人々に(・・・)理解を得ないとは言わないまでも愛好されるわけではないのです。(・・・)ゼゼミ・ヴァイヒプロートの滑稽で確信に満ちた「本当にそうなのよ！」を考えてみてください。²⁶ ---- ⑨

この小説の、そしてゼゼミの絶望感は「冗談めかして」あるのであり、「一般の人に愛好されるわけではない」類のものである。しかし、こう言いながら、「一般の人々に」を強調するとき、実は本人は「愛好」しているのだと言ってこっそりほくそえむマンの姿を、この手紙は垣間見させてくれるのだ。そしてこの文脈において小説を代表させられるのが、我らがゼゼミなのである — しぶとく頑強な女性 7 人をお供に引き連れて。

5. 「確信」

しかし、そもそもマン作品の女性は完全にナイーブと言い切ってしまうのもよいものだろうか。いや、そうだとするとゼゼミの魅力に何ら損傷があるわけではない以上構わないのではあるが、さらに大きな華を持たせるために、彼女を例外の一人として是非とも強調したいと思うのだ。

女性は「考えない」。その一つの例として、女性における宗教の形骸化がマン作品の一つの特徴といえよう。後に述べるように、宗教という精神的な事柄はトーマス・ブデンプロークの、すなわち男性

²⁶ Mann, Erika (Hrsg.): *Thomas Mann. Briefe III. 1948-1955 und Nachlese*. Frankfurt am Main 1965, S.441f. 1902年12月2日 Paul Raché 宛ての手紙。

の専売特許であり、その本質にかかわることは女性には許されていないのだ。ゼゼミ・ヴァイヒプロートも、本人は大いに真剣に精神的な「戦い」を続けていたとしても、それが常にコミカルにしか描かれていない以上、トーマスははじめ男性陣に引けを取るといわざるを得ないだろう。けれども、だからといってゼゼミを完全な道化とってしまったら、それは間違いというものである。ゼゼミは、この問題においてある意味最もマンに近い位置で、彼女にしか出来ない離れ業を披露するのである。

トーマス・マンとキリスト教のかかわりという際に、常に争われてきたのが「果たしてマンはキリスト教徒といえるのか」という問題である。戦前にはマンが「キリスト教性」に欠けることにただただ驚きあきれて「非難」する研究も存在したが、²⁷ その後、Frizen や Dierks などマンを非キリスト教的に位置付ける陣営²⁸ は、マンの宗教的知識がきわめて限られたものであることを証明する Lehnert²⁹ を受け、宗教の代替物としてのショーペンハウアーやニーチェの重要性を主張している。一方マンを宗教的に理解しようとする研究には、神学者 Rahne の理論³⁰ によってマンを「匿名のキリスト教徒」と呼ぶという論理を展開する Mieth のほか、³¹ Sölle や Borchers の名があげられる。³² この論争は現在なお続いていて、2001年には Wienand が実存主義の立場からマンの神学的解釈に激しく対立する論文³³ を発表し、さらに2002年には Marx が、マンは決して信心深い宗教家ではないという前提の上で、マン作品におけるキリスト像の問題を扱っている。³⁴ ついでに紹介しておくならば、日本においてはマンの宗教を扱った論文は少なく、稀有な例としては空井氏の研究³⁵ を挙げることができるが、これは親鸞との比較からマンの宗教性を論じたものであり、キリスト教の問題を正面から扱うには至っていない。

ゼゼミの解釈においては「マン＝非キリスト教的」派が圧倒的優性を占めている。Lehnert は彼女の「偽りの確信は、読者がゼゼミの戦いに対しては微笑むことしかできなくなるほど、傷つけられてし

²⁷ この時期の先行研究については次を参考にした。Frizen, Werner: *Thomas Mann und das Christentum*. In: *Thomas Mann Handbuch*, Stuttgart 1995, S.307f.

²⁸ Ebd., 307ff. Dierks, Manfred: *Studien zu Mythos und Psychologie bei Thomas Mann*. Bern / München 1972 (=Thomas-Mann-Studien III).

²⁹ Lehnert, Herbert: *Thomas Mann. Fiktion-Mythos-Religion*. Stuttgart 1965.

³⁰ Rahner, Karl: *Die anonymen Christen*. In: *Schriften zur Theologie*. Bd.6. Benziger 1965, S.545-554.

³¹ Mieth, Dietmar: *Epik und Ethik. Eine theologisch-ethische Interpretation der Josephromane Thomas Manns*. Tübingen 1976. Mieth は、『ヨセフとその兄弟たち』においてマンが「行方不明な物語の徹底した世俗化も」(マンの)信仰から目をそらさせている」にすぎないと断定する。(S.49.)

³² Sölle, Dorothee: *Realisation. Studien zum Verhältnis von Theologie und Dichtung nach der Aufklärung*. Darmstadt / Neuwied 1973; Borchers, Klaus: *Mythos und Gnosis im Werk Thomas Manns. Eine religionswissenschaftliche Untersuchung*. Freiburg 1980.

³³ Wienand, Werner: *Größe und Gnade. Grundlagen und Entfaltung des Gnadenbegriffs bei Thomas Mann*. Würzburg 2001.

³⁴ Marx, Friedhelm: „Ich aber sage Ihnen...“ *Christusfigurationen im Werk Thomas Manns*. Frankfurt am Main 2002 (=Thomas-Mann-Studien XXV).

³⁵ 空井義嗣「トーマス・マンにおける宗教性について」、九州大学『独仏文学研究』27号(1977年)、211～220頁。

まう」と酷評しているが、³⁶ Tebbel や Neumann もこれを基本的に踏襲している。³⁷ というのは、マンを宗教的に解釈しようとする陣営で扱われるのは『ヨセフとその兄弟たち』や『魔の山』、『ファウスト博士』といった後期作品ばかりであって『ブデンプロック家の人々』はほとんど問題外とされているのだ。最新の研究で Marx もこの作品を「牧師の博物館」と評しながらも、宗教的な要素は低いとして退けているし、³⁸ 最近改めてマンの長編を論じた Neumann も『ブデンプロック家の人々』の「宗教と伝統」と銘打った節で、狭義の宗教にはほとんど触れず、むしろショーペンハウアーやニーチェとの関係に終始して「マン＝非宗教的」派に貢献している。³⁹ これはつまり、後期の作品においては何とかマンの宗教性を強調しえた研究者も、若いトーマス・マンの初の長編には「冷やかし」や「茶化し」以上のものを見つけることができず、むしろいわゆる「ショーペンハウアーの章」のトーマスの体験が作品中最もそして唯一「本質的に宗教的な」箇所として解釈されてきたということを示している。

実際『ブデンプロック家の人々』では、マンは非キリスト教的どころか、反キリスト教的といつてよい。というのも、この作品中、キリスト教に対する皮肉・批判と取れる箇所は枚挙に暇がないのだ。ジャンの信心は商人としてのエゴイズムを自らに対して欺くための道具として描かれているし、コンズル夫人が熱心に祈りの会を開くのは「天国にしかるべき場所を探す (I /279) 」ためと、その不純さへの批判が向けられる。トーマスの教会嫌いは言うに及ばず、同じキリスト教内部のカトリックとプロテスタントの陣取り合戦も実に醜く描かれている。そもそも小説は老ヨハンがシルターの教理問答をからかうところから始まっており、Lehnert はそれがこの小説全体を象徴していると解釈している。⁴⁰

けれども、マンの宗教性が否定されるとき、それは彼がキリスト教徒たちの偽善的な倫理性を批判的に描いているからばかりではないのだ。むしろ、宗教の宗教たる所以、キリスト教における超越的なものの存在 — すなわちここでは特に「死後の世界」が否定されているように見えるからである。

市参事会員ジェームズ・メレンドルフの文字通り救いのない死 (I /407) をはじめこの作品には、さまざまに肉体的・現世的でグロテスクな死が描かれる。しかしそのみならず、コンズル夫人の信仰も天国へのしかるべき場所への「物色」でしかないと否定され、トーマスに至っては死後の世界について考えることすら自らの地位にふさわしくないと思い自分からこの世界の探求を断念するのだ。これは、マンにとってのキリスト教が「神は死んだ」時代のキリスト教であり、宗教の「宗教的」側面、つまり人間を超えたものへの関心、ここではすなわち「死後の世界への信仰」を完全に剥奪されて、宗教の「倫理的」側面だけが 19 世紀の文化として残った時代のキリスト教であることを端的に示している。トーマスのショーペンハウアー体験が研究者によって宗教的に評価されるのも、唯一ここに宗教の代

³⁶ Lehnert, Herbert: *Thomas Mann: Buddenbrooks (1901)*. In: Paul Michael Lützeler (Hrsg.): *Deutsche Romane des 20. Jahrhunderts: neue Interpretationen*. Königstein 1983, S.32.

³⁷ BH, S.279f. Neumann, Michael: *Thomas Mann. Romane*. Berlin 2001, S.33f.

³⁸ Marx, S.18.

³⁹ Neumann, S.31f.

⁴⁰ Lehnert (1965), S.77.

替物としての超絶的な存在を垣間見ることができるからであり、ゼゼミの完全に真剣な告白が「偽り」と思われてしまうのも、この作品の中で「実際の」キリスト教によって描かれるものが「真に宗教的な意味での」キリスト教であるはずがないという先入観からなのだ。しかもゼゼミが女性であることがその解釈を増長させた可能性は低くはないだろう。なぜなら女性は「考えない」のであり、形骸化されたキリスト教以上のもの、超絶的な存在を感じ取る精神性を持ち合わせているはずがないのだから。

しかし、これまでみてきたように、ゼゼミの告白は少なくとも本人にとって決して「偽り」などではなく、彼女は近代合理主義ヨーロッパ人一般に該当する深刻な問題を一身に背負っている。その姿はリアリズムの手法で説得力をもって、しかもトーマス・マン流の「頑強さ」の象徴としてマンの心にかなう人物として描かれているのだ。さらに、ゼゼミのこの確信はより重要な含みを持つものとして解釈することもできる。つまり、このゼゼミの信仰への決意は、ゼゼミ本人のものにとどまらず、この小説のある意味真の主人公トーマス・ブデンブロークの、さらにはトーマス・マン自身の意志をも表していたと考えることが可能なのである。

ゼゼミ・ヴァイヒプロートとトーマス・ブデンブローク。二人の性質を比べるなら、ゼゼミの中にトーマスの滑稽な縮小形を見出すことは難しいことではない。彼らは共に「知識人」であり、それが故に疑うという苦しみを知っている。しかしそれは同時に彼らの誇りでもあり、トーマスが弟クリスティアンや他の無知な市民を軽蔑するようにゼゼミも姉を軽蔑する(引用④参照)。二人ともに死期が近づくに連れ知識人として死後の世界について思いをめぐらすのが、これはゼゼミ同様トーマスが「近代人」の不安を象徴しているということの証拠である。ゼゼミはきわめて宗教色の濃い登場人物であり、一方先述のようにこの作品中最も宗教的に解釈されるのはトーマスの体験するいわゆる「ショーペンハウアーの章」なのだ。

私は生きていく！とトーマス・ブデンブロークはほとんど声に出して言い、心がすすり泣くあまり胸が震えるのを感じた。これこそが、私が生きていくということだったのだ！「それ」Esは生きていこう…そしてその「それ」が私ではないなどというのはまやかさに過ぎなかったのだ。それは死が訂正してくれる誤りなのだ。そうなのだ、そういうことなのだ…！
(I/656) …… ⑩

これほどの陶酔にもかわらず、この救済の世界は二度と戻ってこない。トーマスはこの体験を完全に忘れ、その後一瞬足を踏み入れたキリスト教の教えにも納得がいかず、結局問題をうやむやにしてしまう。そしてその先延ばしにされた難問の解決にあたかも再度挑戦するように、ゼゼミがこの問いを受け取るのだ。それも「近代人」として宗教を疑うという苦難を乗り越えたうえで。トーマスの戯画化として描かれるゼゼミが「本当にそうなのよ！」と死後の世界への信仰を宣言するとき、ゼゼミはトーマス

マスの死後の夢、ショーペンハウアーの理論によって「Es」に託された夢 — すなわちこの作品において最も宗教的な要素 — をも同時に背負っていたのだ。ゼゼミは、最後の場面で主人公トーマスの代役をさえ務め、マンの意志を背負う。そのとき、彼女の信仰告白は、にわかには圧倒的な迫力を持ってマンの — 広い意味での — 「宗教性」をクローズアップし、その後のマンの「超越するもの」への関心を予感させるのだ。

もちろんそれが当時のマンにとってどのくらい確信的であったのかという評価は慎重を要する。それは本人の意識・無意識にかかわらず文化的刻印として消し去れないという性質のものであったはずであり、否定しつつ肯定し、肯定しつつ否定するというマン特有の関心のあり方において重要であったのだ。だからこそそれは、きわめて控えめな、込み入った形によってのみ表現されることであったに違いない。そしてそれを唯一可能にしたのが、本人にとってはこの上なく真剣な、しかし他の誰にとっても意味をなさないという特殊な緊張関係の中で確信に震えるせむしのおばあちゃん、我らがゼゼミ・ヴァイヒプロットだったのである。

Sesemi Weichbrodt – Frauenbild und Christentum in den *Buddenbrooks*–

ITO Mashiro

Sesemi Weichbrodt, an sich nur eine Nebenfigur, spielt trotzdem eine wichtige Rolle in den *Buddenbrooks*, denn sie ist die letzte der auftretenden Personen. Mein Beitrag beschäftigt sich daher mit der Frage nach der Bedeutung dieser buckligen Lehrerin für den Roman. Dabei geht es auch um Frauenbild und Christentum bei Thomas Mann und wie beide sich zueinander verhalten.

Den bisherigen Forschungen galt Thomas Mann nicht gerade als der Schöpfer großer Frauengestalten. Das scheint mir jedoch nur bedingt richtig zu sein: Meiner Meinung nach stellt Mann die weiblichen, von der Männerwelt aber übersehenen Nebenfiguren im Gegensatz zu den „Heldinnen“ psychologisch meisterhaft und überzeugend dar. Diese Fähigkeit erklärt auch seine Vorliebe für solche Frauen wie Sesemi Weichbrodt.

Die bisherige Forschung sah in den weiblichen Figuren des Romans lediglich naive Wesen und behandelte sie mit einer gewissen Geringschätzung. Doch gerade ihre Naivität, ihre Einfachheit befähigt die Frauengestalten des Romans zu jener Zähigkeit, in der wiederum ihre Stärke liegt. Dieser Charakterzug entspricht in gewisser Weise Thomas Manns eigener Unverwüstlichkeit, die ihn alle auftretenden Schwierigkeiten überleben ließ. Sesemi kann, weil sie das letzte Kapitel der *Buddenbrooks*, in dem nur Frauen auftreten, beschließt, als vom Dichter bewußt gewählte Vertreterin dieses Frauentyps interpretiert werden.

Eben weil sie als naiv galt, wurde auch an der Echtheit ihrer Religiosität gezweifelt. Diese Auffassung suche ich in meinem Aufsatz durch eine sorgfältige Analyse der Sesemi-Darstellung im Roman zu widerlegen: Meiner Meinung nach ist Sesemi nicht nur eine einfache Frau, sondern besitzt jene „echte Religiosität“, die man im Werke Thomas Manns sonst nur bei Männern zu finden glaubt.